

信長の近江侵攻

永祿四年（一五六一）、織田信長は浅井長政と同盟を結び、美濃の斎藤氏を攻略、さらに、永祿十一年（一五六八）には、亡命していた足利義昭を征夷大將軍にするという大義名分を得て、入京を果たしました。

しかし、元龜元年（一五七〇）四月、信長が越前の朝倉氏攻めを始めると、朝倉氏とも同盟関係にあった浅井氏が突如織田軍を攻撃してきました。そのため、信長は一時撤退を余儀なくされましたが、六月には徳川家康の援軍を得て体制を整え、姉川にて浅井・朝倉連合軍を破りました。その後、浅井氏の居城・小谷城の攻略に長期戦で挑み、天正元年（一五七三）、ついに小谷城は陥落、浅井氏は滅亡しました。

こうして、近江の戦国時代を彩った京極氏、六角氏、浅井氏の時代は終焉を迎え、近江は新たな時代を迎えることとなったのです。

姉川・小谷合戦関連城郭

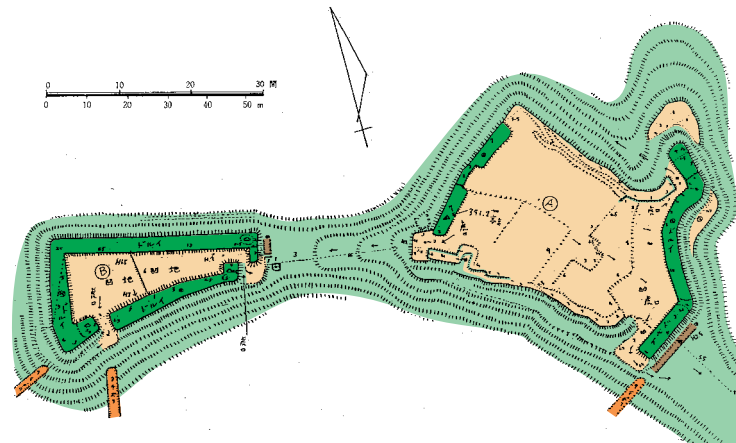
長比城

坂田郡山東町長久寺

近江と美濃の国境で東山道を押さえる要衝に長比城がありました。信長から離反した浅井長政は信長の近江侵攻に備えるため、朝倉氏の築城技術を導入して改築を行っています。しかし、城主堀秀村は信長の侵攻を前にして戦わずして降伏してしまいました。現在、虎口や土塁が良好に残っているのを確認できますが、これらの遺構は戦国時代後半の築城を示しており、『信長公記』元龜元年六月十九日条にみえる「たけくらべに要害を構へ候」という文献記録とも時期が一致します。



長比城跡



長比城跡平面図

横山城

坂田郡山東町村居田

鳥脇・朝日

長浜市石田町

山東町と長浜市の境界にある臥竜山系にあり、標高三一二mの最高所より三方の尾根上に遺構が広がっています。築城年代は不明ですが、当初は京極氏の支城として築かれ、その後、浅井氏が台頭していくと、その所有するところとなりました。元龜元年（一五七〇）、

信長の近江侵攻の際には、横山城は織田軍に包囲され、その後、救援のため出陣した浅井長政が姉川にて敗れたのが知れると、浅井方の守将は逃亡してしまいました。以後、信長は横山城に羽柴秀吉を置き、天正元年（一五七三）までの間、小谷城攻略と畿内平定のための拠点として度々利用しました。

横山城には四十ヶ所以上に及ぶ曲輪があり、各所に土塁、堀切、堅堀などの防御施設を設けて堅固なつくりになっています。



横山城跡より坂田を望む
(長浜市教育委員会提供)



横山城跡平面図▶